

想像界の生物相

カワウソ老いて河童になる？

民博 人類文明誌研究部 卯田 宗平



| |
|-------------------------|
| 資料名 水虎様 |
| 標本番号 H0015887 |
| 地域 日本、青森県 |
| サイズ 高さ 25cm × 幅 22 cm |

四川省遂寧市を流れる川のほとりを歩いてきたときのこと。目の前に立つ古ぼけた小屋のなかで小さな動物が昼寝をしていた。これを見たわたしは「カワウソだ」と声を上げた。横にいた漁師に後で聞くと、ほとんど絶叫に近かったらしい。

この地域ではカワウソを使った漁がおこなわれていたが、実際に見たのは初めてであった。昼寝中のカワウソをよく見ると、扁平な頭部、ほぼ一直線に並んだ目と鼻と耳、細長い胴体、太くて大きな尾が特徴的である。なんとも可愛い。

こんなカワウソだが、じつは見た目以上に大食漢であり、癡猛である。肉食性のカワウソは、鋭い小臼歯で魚の骨や貝殻まで砕いて食べる。「噛まれたら手に穴があく」とは中国の漁師のことばである。毎日の摂取量は体重の一五パーセントほど。体重七五キログラムのわたしでいうと毎日一キログラムを食べていることになる。さらに、ブラジルなどに生息するオオカワウソは「川のオオカミ」ともよばれ、集団でワニなどを襲うこともあるという。

◆◆河童伝説のモデル◆◆

かつて日本各地にはニホンカワウソが広く生息していた。江戸時代の料理書『料理物語』にはカワウソの項目があり、料

理法として「吸い物」などが挙げられている。当時、カワウソはそれほどめずらしいものではなかったといえる。

日本の河川には河童伝承が広く残っているが、その正体は各地に生息していたカワウソであるともいわれる。古くは室町時代中期に編纂された国語辞典『下学集』に「頼老いて河童に成る」という記述がある。カワウソは尾を支えに立ち上がることができ、平らな頭部に皿をのせているようにも見えるので河童に間違えられたのだろう。

◆◆水難除けの祈願◆◆

今でも毎年夏になると、子どもたちの水難事故が後を絶たない。青森県津軽地方では、湖や川で子どもが溺れると河童に水へ引き込まれたとされる。水辺の事故は河童の仕業だといわれる。このため、津軽地方では初夏になると河童の姿をした水神である「水虎様」に水難よけを願う。地元の人たちは、河童の好物であるキユウリを供え、悪さをしないように祈る。

大人たちが水辺を指さし「河童が出るので近づくな」と言うことは、子どもたちの水難予防に意味があっただろう。想像をたくましくしていえば、その警告

は、可愛いがじつは癡猛な一面をもつカワウソとの遭遇を避けるための戒めだったのかもしれない。

そんなニホンカワウソも二〇二二年に絶滅が宣言された。世界でカワウソを絶滅に追い込んだのは日本だけである。自らのモデルを失った日本の河童は、今各地の水辺で何を思っているのだろうか。



右：投網漁で使われているカワウソ（中国四川省、2007年）
左：夜の漁を終え、日陰で寝ているカワウソ（中国四川省、2007年）